

市史編さんだより 第19号

発行 令和7年12月27日

バスツアー細川を巡ろう！～細川の魅力を再発見～開催



教海寺での見学の様子



鬼面（教海寺）



龍の彫刻（三坂神社）



三坂神社での見学の様子



藤原惺窩誕生地での見学の様子

『細川の歴史』刊行を記念した企画展「地域の歴史8～細川の歴史～」の関連イベントとして、令和7年11月15日（土）に「バスツアー細川を巡ろう！～細川の魅力を再発見～」を開催し、22名の方にご参加いただきました。当日は晴天に恵まれ小春日和の中、藤原惺窩誕生地・脇川山教海寺・三坂神社（豊地）の3か所を巡りました。

藤原惺窩誕生地では、細川町が生んだ儒学者藤原惺窩の生涯を振り返りながら、細川町と冷泉家について市史編さん室廣井から話をしました。脇川山教海寺では衣巻住職に弘法大師（空海）と縁の深い寺の歴史について、文化遺産部会員神戸佳文氏に市史編さん調査で教海寺から新たに発見した鬼面（阿と吽の対の2面）

についてわかりやすく説明をしていただきました。三坂神社では向山宮司に境内や社殿内など余すところなく説明していただきました。普段なかなか見ることができない貴重な資料を目の前で拝見する機会となりました。

市史編さん事業は昨年（2024）で10周年を迎えました。今回、初めての試みとしてバスツアーを企画しました。帰り道では、参加者の方々に「参加してよかった、楽しかった」などの声をいただきました。今後も調査などで知り得たことをいろいろな形でお伝えし、市史編さん事業を通じて三木市の魅力を皆さんに再発見していただけるように努めていきたいと思っています。今後とも市史編さん事業にご協力をお願いいたします。

（中谷）

《市史の窓》戦争への協力と被害～志染・戸田の史料から～

志染町戸田の区有文書のなかに「支那事变諸記入簿」という、軍に動員された地区住民の名簿、戦争関係の出入費の記録、奉仕活動の記録などを綴り込んだ簿冊があります。記録が始められたのが昭和13年(1938)なので表題が「支那事变(日中戦争)」となっていますが、実際には昭和20年以降の復員の一部まで書き継がれており、大陸戦線を含む太平洋戦争全体に関わる内容となっています。

簿冊冒頭の「支那事变軍務公用者名簿」には100名以上の名前が挙がっています。このなかには応召兵といって、成人して現役兵として徴兵された後、任期を終え帰郷していた男性もたくさん動員されたことが記録されています。皆さんもドラマや映画で、役場の兵事係が赤紙(召集令状)を届けにくる場面を見たことがあるでしょう。そうした場面が志染でも見られたことがわかります。また、名簿には再応召という文言が散見され、戦地から帰還して数年で再び軍隊へ戻される例もあったことがわかります。一度御奉公を終えたらもう安心、というわけではなかったのです。名簿上の戦死・戦病死者は、戸田地区だけでも十数名に上ります。なお派遣先は中国、満洲、朝鮮のほか、昭和10年代後半になるとジャワ、比島(フィリピン)、ボルネオなど、前線の拡張に伴い遥か南方に及びました。

簿冊後半には、軍務に就く仲間の見送り、出迎え

に関する取り決めが記されています。地区からの出征兵士は御坂神社で見送り、氏神の八幡神社・大宮神社で武運長久を祈願したそうです。定期的に慰問品を送ることも決められており、

戦地で苦労する仲間との結束を保とうとしていた様子が窺われます。慰問袋の中身は菓子、手紙、手拭い、煙草、若い女性の写真といった定番の品のほか、三木らしいものとして、詳細不明ですが「長治アメ」という飴(?)が入れられることもありました。

戦没者の供養についても取り決めがありました。祭壇の設け方、法要に参列する区の役職者の範囲、香料や供物購入に支出する金額の目安などが定められています。地区から出征した兵士が亡くなった際は、一家族の問題ではなく、地区の英霊として弔われることになっていました。

一連の取り決めの末尾には、「過去の該当者らに悪感を与えやすいので、特別の場合を除き大きく変更しないことが望ましい」旨が付記されています。戦中戦後の村には、生存者と戦没者遺家族との併存、さらに金銭という禍根を生じやすい問題が幾重にも絡み合っていたため、取り決めに平等に適用することが求められました。名誉の戦死という建前に隠された生々しい本音の部分が伝わってきます。こうした決まりは死者のためばかりではなく、生きている者のためにも必要だったのです。

さて、兵士の見送り方には国や軍から要請が入ることもあったようです。入営時の幟や提灯を廃止し国旗を掲揚するよう「其筋」から通達があったこと、昭和15年には、知人を招いた入退営時の盛宴を廃止することも記されています。理由として俟約のほか、盛大な見送りによる動員の可視化が防諜上不都合であったことが研究で指摘されています。しかし要請があったということは、(地域差はあるにせよ)元来は幟や提灯を仕立て、時には酒席を設ける一大行事であったわけですから。ハレの場は兵士本人およびその家族の心情的にも必要なことだったのでしょう。一方で戦争の拡大に伴い、軍事的要請や死者・傷病者およびその家族の増加にも配慮が必要な状況が現れてきました。狭い範囲で濃密な人間関係が展開されていた当時の農村では、こうした矛盾は不可避であったと思われます。

兵士やその家族・遺族とどのように接したか、郷土と戦地の結びつき、そして関係者の心情など、戦争経験者、特に軍隊経験のある方が少なくなってしまう現在、文字から地区の戦時体制の一端を窺える貴重な地域資料と言えるでしょう。(牧野)

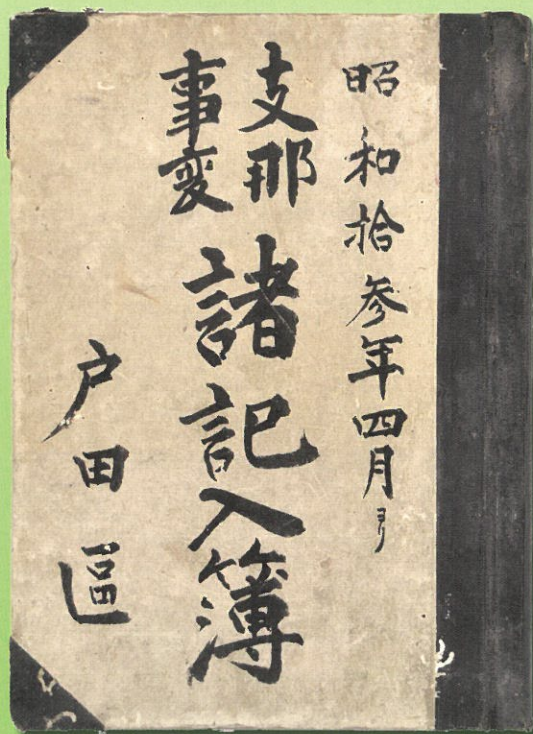


写真 「支那事变諸記入簿」(1938年4月～)

市史編さん室が行う「調査」とは？～石造物調査 その2

新しいものばかりといわれている三木の墓石 今回、石造物の中で最も身近な墓石、供養塔の調査について、お話ししたいと思います。

まず気になったのは、「三木は三木合戦（1578～1580）で負けたので、それより古い時代ものはほとんどなにも残っていない」と巷で言われている言葉でした。たしかに、寺院や神社の建造物は、大半が近世以降、しかも徳川家康が江戸幕府を開いて以降



写真 墓地の隅に集められた古い墓石（中には江戸時代初期以前のものらしきものも含まれる場合がある）

のものですし、古文書と呼ばれる歴史史料も戦国時代の三木合戦以前のものは、極端に少ないようです。

「石造物も同じなのだろうか」。調査を始めてしばらくして、頭の中に疑問がわいてきました。三木の中世の石造物については、古くは田岡香逸氏が現地調査した結果を『みなぎの通信(第2号)』(昭和37年)誌上によって明らかにし、比較的最近では、石造物の研究者である藤原良夫さんが『三木史談(第43号)』(平成12年)において新市誕生前の三木市域で年代がわかるもの15点ばかり紹介されていました。また、同じ年に吉川町教育委員会(当時)が『吉川町の石造物』で刻銘がないものも含め40点掲載しています。

石に刻まれた銘文によって造立年代がわかるものはいくつもありますが、姿かたちによって時代がわかるものは、市内にどれくらい残されているのだろうか。特に近世初期以前の物がどれくらいあるのだろうか。市史編さん室には石造品の専門の者がいないことから、この疑問を前述の藤原良夫さんにぶつけたところ、「結構ありますよ」とのお返事でした。そこで、藤原さんに中世から近世初期のものと考えるものに特化して、三木市内全域の悉皆調査を依頼することとしました。

意外に多かった古い三木の墓石 藤原さんの精力的な調査により、その可能性のあるものも含めて実に約3,000点以上にのぼりました。ただし、五輪塔などといった供養塔が一式ひとそろいで組まれて残されているものは、たしかに多いとは言えない状況でした。なかにはばらされ墓地の隅っこに打ち捨てられたように半分土に埋もれているようなものもあります。そうした場所が三木市内にかなりあることがわかりました。つまり、村にある墓地の中には、江戸時代初期までの墓石を撤去し、更地にして新たな墓地とし、現在に至ったものが相当数あることがわかってきたのです。

そうした村の中には、村のはじまりがいつかさえ史料的に分からないのが一般的です。しかし、その村の墓所に中世の墓石が横たわっているものが残っていることで、村の起こりが遅くとも中世に遡ることがわかるのです。

細川町の小川川をさかのぼると大二谷と呼ばれる地域があります。ここに鎮座する大歳神社の境内奥に経塚があったとされ、宝篋印塔が建立されています。経塚は、平安時代の中頃から鎌倉時代にかけて広まった末法思想に基づくものとされ、経塚付近に建つ宝篋印塔は残念ながら塔身と呼ばれる中央の部分が失われていますが、残された形状から南北朝時代後期(14世紀後半)のものと推定されています。つまり、こうした村においても末法思想が浸透し、その後立派な仏塔を建立して、代々社会の安寧を願ったことがわかるのです。(次号に続く) (廣井)



写真 大二谷地区(細川町)の宝篋印塔

編さん室トピックアップ

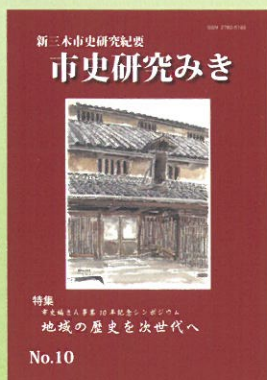
みき歴史資料館企画展「地域の史料たち8～細川の歴史～」の開催

令和7年10月18日（土）から12月21日（日）まで、みき歴史資料館において企画展「地域の史料たち～細川の歴史～」を開催しました。本展は、令和7年3月に発刊した地域編『細川の歴史』の編さん過程で見いだされた地域史料の現物を、直接観覧いただけるよう企画したものです。関連イベントとして、本紙1面で紹介したバスツアーのほか、12月13日（土）に渡邊大門氏による「細川荘と冷泉家」と題した企画展特別講演会を開催しました。



研究紀要『市史研究みき』第10号の発行

令和7年12月20日付で、研究紀要『市史研究みき』第10号を発行しました。本号では、令和6年11月に開催された市史編さん事業10年記念シンポジウム「地域の歴史を次世代へ」での講演・報告で構成した特集などを掲載しました。研究紀要は、みき歴史資料館や三木市史編さん室な



どで販売しています（頒価500円）。詳しくは市史編さん室まで。

新三木市史 既刊分も好評発売中！！

新三木市史は、既刊分（通史編3冊、地域編8冊）が好評販売中です。市史編さん室（郵送対応可）、みき歴史資料館、三木市観光協会、山田錦の館、市役所内売店たんぽぽ、三木市立中央図書館、細川町公民館（『細川の歴史』のみ）で販売しています。お問い合わせは、市史編さん室まで（連絡先は、下記奥付をご参照ください）。

〈既刊分〉

通史編

第4巻 資料編 古代・中世 ￥3800

第5巻 資料編 近世 ￥3800

第7巻 資料編 文化遺産 ￥3800

地域編

1 『三木の歴史』 ￥3800

3 『別所の歴史』 ￥3000

4 『志染の歴史』 ￥3000

5 『細川の歴史』 ￥3000

6 『口吉川の歴史』 ￥3000

7 『緑が丘の歴史』 ￥2500

9 『青山の歴史』 ￥2500

10 『吉川の歴史』 ￥3500

（いずれも税込み）

文化遺産編刊行記念講演会を開催します

令和8年3月14日（土）13:30より口吉川公民館において、講演会「蓮花寺の寺宝からひもとく三木の文化財」を開催します。内田俊秀氏（文化遺産部会長）の講演、および同氏と密祐浩氏（蓮花寺住職）との対談を予定しています。詳しくはHP・チラシ・広報等をご覧ください。

古い資料や写真を探しています！

皆さんのお近くにある古い記録類は、地域の歴史を物語る大切な歴史遺産です。下記のような資料の情報をお持ちの方は、ぜひ市史編さん室までご一報ください！

◆くずし字で書かれた帳面や一枚ものの文書などの古文書◆明治・大正・昭和の古いノートや記録（日記・手紙など）◆三木市域の古い写真、絵画、映像など◆自治会などの団体、地域でのグループ活動などの記録や資料◆古いふすまや屏風（古文書が、下張りに使われていることがよくあります）etc.

市民ボランティア募集中！

市史編さん室では、市内の文献資料を記録に残す作業を行う市民ボランティアを募集しています。古文書が読めない方でも参加可能です。見学だけでも大歓迎です。詳しくは市史編さん室までご連絡ください。

◆開催日時：毎週水・木曜（どちらか1日の参加でもOK）13:00～15:00／場所：みき歴史資料館2階市史編さん室

活動内容：①古文書のデジタル撮影、②江戸時代以降のくずし字解読（翻刻作成）、③資料の修復（しわのぼし・糊づけ等）、④新聞検索（各紙から三木に関する記事を選別）、⑤古文書現物からの目録作成、⑥パソコンでの目録データ入力

市史編さんだより 第19号（令和7年12月27日発行）

編集発行：三木市総務部 市史編さん室

連絡先：〒673-0432 兵庫県三木市上の丸町4-5 みき歴史資料館2階 電話 0794-83-1120 / FAX 0794-83-1190

ホームページURL：https://www.city.miki.lg.jp/soshiki/9/